

研究論文

19世紀中葉の厦門における
プロテスタント宣教師による言語教育
—中国における言語改革の起点として—

赤 桐 敦

キーワード：言語教育政策史、文字改革、教会ローマ字、白話字、プロテスタント宣教師

要 旨

現代中国語の創出に到るまで、中国では19世紀末から20世紀中葉にかけて、言語改革運動が繰り返された。本稿は、この言語改革の雛形が、19世紀中葉のプロテスタント宣教師による、厦門の民衆を対象とした言語教育にあると措定し、その背景や実施状況と影響を文献資料より考察する。アヘン戦争後、厦門に上陸したプロテスタント宣教師は、漢字・漢文が中国の民衆の無知を生み出していると考え、1850年代から、ローマ字化した厦門語を用いて、民衆に対する言語教育を実施した。この言語教育は高い効果を示し、3か月ほどの学習で読み書きできるようになるため、その後、厦門近郊、台湾、東南アジアの華僑へと拡大する。これに影響を受けて、1890年代に開始された中国人による言語改革運動は、簡易な表音文字による民衆に対する言語教育を訴えたが、これは中国の伝統社会を覆す言語教育観であった。

1.1. はじめに

19世紀末から20世紀の中国において、1890年代の「切音字運動」、1910-30年代の「国語（中国語）運動」、1950年代の「文字改革運動」と、言語改革運動は繰り返されてきた。これらの運動はそれぞれ、切音字運動は清朝末期の戊戌変法運動（1898）に、国語（中国語）運動は中華民国期の新文化運動（1915-1923）に、文字改革運動は中華人民共和国成立（1949）直後の共産主義運動の高まりにと、中国社会の変革運動と連動しており、そこでは「漢字・漢文の難解さが民衆の無知を生み、中国社会の近代化を阻んでい

る」との主張が形を変えて何度も現れる¹⁾。中国の社会改革をめざす知識人は、民衆を主体とする近代国家を成立させるためには、民衆が無知ではならず、民衆教育のためには言語改革が必要だと考えたのである。では、この民衆の知力を問題視する言語教育観は、どのようにして中国にもたらされたのだろうか。

歴史的な経緯を考察すると、1890年代以前には、「すべての民衆に対して言語教育を行わなければならない」との発想は中国人の言説に見られない。清朝による初めての本格的な近代化運動である洋務運動（1860-1895）において、民衆の言語教育は重要な課題とはなっていない。このため、京師同文館（1862年設立）や福州船政局に付属した船政学堂（1866年設立）では西洋文明が教授されたが、その学習者は漢字・漢文を駆使し、外国語を習得できる読書階層に限定されていた。中国において読書階層は、教養と道徳において民衆とは異なる高い能力を持つと考えられていたのである。

中国社会は、6世紀にすでに血統主義にもとづく貴族制の限界を認識しており、漢字・漢文に秀でた者を、試験によって選抜き官僚とする科挙制度が創られ、存続してきた。このため、社会の中で、高い識字能力を持つ者が、民衆とは異なる読書階層を形成し、一部の知的エリートが無知な民衆を導く、と考えられていた。19世紀の西洋文明の摂取に際しても、読書階層の教育のみが問題となり、民衆に西洋文明を教えることは問題とはならなかった。近代化の実現には、すべての民衆を教育しなければならない、という認識は、中国の伝統社会から生まれることはなかった。

盧戇章（1854-1928）は中国人として初めて、書記言語が読書階層に独占されていることを疑問視し、中国社会の近代化には、すべての民衆に言語教育を実施しなければならないと、宣教師の漢字雑誌『万国公報』（1868-1907）の「変通推原説」（1895）の中で訴えた（赤桐2016: 9-12）。その中で、国家を振興するには民衆の知力を高める必要があり、漢字を改革することにより中国社会を変革する、との考え方が初めて示された。張之洞（1837-1909）の幕僚であった蔡錫勇（1850-1896）はこれに影響を受け、『伝音快字』（1896）を出版し、戊戌変法運動の中心人物であった梁啓超（1873-1929）も、盧と蔡の影響を受けて『時務報』（1896-1898）において、中国全土の知識人に向けて新たな言語教育の重要性を訴えた（赤桐2016: 14-16）。

盧の主張は、その後に繰り返される言語改革運動の雛形となる。盧はこの新たな言語観の着想を、廈門のプロテスタント宣教師（以下、宣教師と呼ぶ）の言語教育から得た²⁾。盧は、廈門近郊の同安県の農村の生まれで科挙を受験しているが、最初の試験である「県試」に合格した「文童」に過ぎず、読書階層での地位は極めて低かった。その後、20歳でキリスト教に触れ、21歳から25歳までシンガポールに滞在する。帰国後は、盧

は廈門のコロンス島に居住し、英語と漢籍の知識を生かして、廈門の宣教師マクゴワン (John Macgowan, ?-1922) の廈門語辞書 (*English and Chinese Dictionary of The Amoy Dialect*) の編纂を手伝い、宣教師の言語教育を深く知ることになった³⁾。

盧は「変通推原説」において、民衆教育のために、「切音新字」と呼ぶ表音文字の導入を訴える。そして、「我が国は未だ切音新字を設けていないが、外国人宣教師が至ったところでは、切音字をもって華人に伝授している。私が住む台厦で言えば、キリスト教を奉じる男女の間で、切音字を知る者は、非常に多い⁴⁾」ためであると解説している。

宣教師の切音字とはローマ字を指しており、盧の言説には、宣教師の言語教育に関する言説との共通点が多い。では、宣教師は、なぜローマ字で言語教育を行ったのだろうか。先行研究において、宣教師の残した言語資料は研究対象となっても、ローマ字で中国の民衆に教育を行ったことは注目されてこなかったため、その背景や実態は明らかにされていない。

1.2. 先行研究の検討

宣教師による言語教育の特徴には、(1) ローマ字化、(2) 廈門語、(3) 民衆教育が挙げられる⁵⁾。先行研究においてこれらの主題は、白話字・教会ローマ字研究、閩南語研究の各領域では取り扱われるものの、言語改革に関する歴史的研究からは重要視されていない。言語改革の過程を歴史的に整理する研究は、1930年代の「国語(中国語)運動」の中で始まり、1950年代の「文字改革運動」に継承されて、現代に到る⁶⁾。歴史的研究において、宣教師は中国語研究と宣教活動のためにローマ字化を行ったに過ぎないと考えられ、これに影響を受けた盧も、拼音表記の先駆者として評価されるにとどまる。歴史的研究の前提には、漢字・漢文と官話とが支配的な言語であり、読書階層による内発的な言語改革の進展を重視するとの考えがあり、そのために宣教師の活動は、一地方で生じた方言の問題として周辺化された。

しかし、この観点から中国人の言語改革を考察すると様々な疑問が生じる。まず伝統社会を覆す言語改革の着想はどこから来たのだろうか。また言語改革が漢字・漢文と官話の改革ならば、1890年代の「切音字運動」の最初期において、盧(1892)『一目了然初階』は廈門語、沈学(1896)『盛世元音』は上海語、王炳耀(1897)『拼音字譜』は広東語と、蔡錫勇(1896)の『伝音快字』を除いて、「方言」の音声表記が試みられたのはなぜだろうか。中国人による北京官話の音声表記が試みられるのは、1900年代の王照の『官話合声字母』まで待たなければならない。さらには、19世紀末から20世紀中葉まで言語改革運動が繰り返され、漢字・漢文の廃止や漢字に代わる文字の導入が改めて議論さ

れたが、近代化以前には漢字・漢文と官話が支配言語であり、その正統が近代へと引き継がれたのであれば、なぜ、これほどまで時間が費やされたのだろうか。

1.3. 本稿のアプローチと課題

読書階層による内発的な言語改革を強調する立場に対して、De Francis (1950) は宣教師と言語改革との関連について言及し、これを受けて蒲 (2009) は宣教師の議論を詳細に整理している。また、藤井 (2003) と村田 (2005) も宣教師の活動が中国人による言語改革に先行していたことを示唆する。これらの研究は、宣教師の活動を外的要因として捉え直すが、中国人の言語改革に対していかに影響を及ぼしたのかを十分に解明するには到っていない⁷⁾。

そこで本稿では従来の研究に依拠しながらも、「言語」の変遷ではなく、言語がどのように存在し、使用されていたのか、といった「人と言語の関係」の変遷に着目する。言語教育政策史研究は、言語そのものではなく、誰に、どのような言語を、どのような形で教えるのかを重視する。

この観点からみれば、廈門語の綴り方を、ローマ字を使って民衆に教えるという宣教師の言語教育は、中国の伝統的な教育対象や教育言語、教育方法を変更する画期的なものであった。廈門の民衆にとって、漢字・漢文は、祭祀や商業活動で多少触れるものの、日常生活で読み書きを求められることは少なく、北京官話はほとんど耳にすることがなかった。彼らの使用する話語は廈門語であり、耳にするのは隣接する漳州語や泉州語程度であった。宣教師は、民衆の言語使用にもとづき、実用的な教育実践を蓄積することで、漢字・漢文に拘束される教育の問題点を明らかにした。これが後に中国人による言語改革を引き起こす。

本研究は、このようなアプローチから、言語改革の起点としての宣教師による言語教育の実態を明らかにし、1890年以降の中国人による言語改革に、どのような影響を与えたのかを考察する。そこで、まず第2章において、中国上陸以前の1830年代の宣教師の中国語観を概観し、第3章で、中国上陸後に宣教師がローマ字化された廈門語を用いて言語教育を実施した背景とその内容を文献資料から解明し、第4章では、中国の言語社会に与えた影響を考察する。

文献資料は、*The Chinese Repository* (1832-1851) や *The Chinese Recorder* (1867-1941) などの宣教師の発行した英字雑誌、辞書、回想録などを中心に、これらの中から、言語教育に関する言説を抽出した。引用文の訳文については、特に明示しない限り拙訳である。個別の研究領域では、宣教師の議論に関してはDe Francis (1950) と蒲 (2009)

を、盧憲章研究及び白話字研究に関しては許（2000、2011）を、宣教師の活動については岩井（1942）とDe Jong（1992）を参照した。

2. 前史：1830年の宣教師の中国語観

2.1. 中国社会と中国人の知性

19世紀初頭、清朝は外国人による宣教を禁止していたため、宣教師は、東南アジアに入植した華僑に対して宣教を行い、また商人に紛れて広州に潜入するなどして、中国での布教の機会をうかがっていた。当時の宣教師の活動と中国観については、広東で発行されていた*The Chinese Repository*から知ることができる。

この雑誌の編集と執筆には、最初の漢訳聖書と『華英辞典』で知られるモリソン(Robert Morrison, 1782-1834)、1853年に日本の浦賀に来航したペリーの首席通訳を務めたウィリアムズ(Samuel wells Williams, 1812-1884)、最初の日本語訳聖書を出版したギュツラフ(Karl Friedrich Augustus Gützlaff, 1803-1851)ら、当時の東アジアにおける宣教活動の中心人物が関わっていた。発行部数は当初400部だったがすぐに1000部を超え、頒布先は中国各地だけでなく、マニラやバタヴィアなどの東南アジア、アメリカ(154部)やイギリス(40部)本国にも送られ、宣教師の中国研究の成果は広く共有されていた(岩井1942: 4-7)。

宣教師の中国研究は、神に創造された普遍的存在としての人間を前提としており、宣教師は、中国の伝統社会の独自性に関心を示しながらも、社会のあり方が人間の本性を歪めるとの見解を持っていた。*The Chinese Repository*の創刊者であるブリッジマン(Elijah Coleman Bridgman, 1801-1861)は、創刊号の巻頭で「我々は、人々の宗教的性格(religious character of the people)に飽くことなき関心を抱く。(中略)人は人に、力と知恵を無限に持つ神の神秘の手によるすべての奇跡の中で、最も興味深い探究の目的を与えるのである」と、同じ神に創られた存在としての中国人の社会を研究する意義を説く。しかし同時にブリッジマンは中国人が無知であることを「東アジアに住む何百万人もの人々には、最も悲しむべき知識の欠如がある」と非難し、「我々は、西洋の国民が現在、豊かに享受している最も価値あるものが、東洋の国民の間でも、彼らを高め、平等に享受されて同じ効果を生じさせる日を予期する」と、西洋文明を教授し、人のあるべき姿へと導くことが宣教師の使命であることを宣言した⁸⁾。

2.2. 漢字・漢文と中国人の性格に対する見方

宣教師は、漢字・漢文をひたすら暗誦し続ける中国の伝統的教育を見て、人間の本性を歪める教育法だと考えた。トレーシー (Ira Tracy, 1806-1875) は、文字の特殊性と中国人の保守的な性格を結びつけて、伝統的な漢字・漢文教育の弊害を次のように分析している⁹⁾。

1. 早期教育の放棄：中国語の書籍は、数百の文字の形と意味とを覚えこんでしまうまで、これを解読することが不可能である。何千もの黒い符号（文字）の形を暗記することは、子どもの知力の発達に影響を与え、青少年を怠惰に陥らせる。
2. 精神の不活発：児童はたとえ暗記に長じたとしても、精神は甚だしく歪められ、中国人の思想に変化がないことの原因となる。
3. 落ちこぼれ、失敗する学習者が多い。
4. 時間の無駄：アルファベットを用いれば、学習時間を3分の1、或いは4分の1に短縮できる。
5. 無知：漢字・漢文の習得に多くの時間を費やすので、これ以外何も学ぶことができない。中国人は地理、数学、天文学などについてほとんど無知である。

このトレーシーの中国語観は、子どもの教育という観点から、漢字・漢文の弊害を指摘した点で画期的である。漢字・漢文はその難解さと学習の困難さゆえに、民衆に対して威光を放っていた。漢字・漢文の学習には、入門時に『三字経』や『百家姓』などの子ども向け教材が用いられるが、少し学習が進むと、大人が使用するのと同じ四書五経を教材として学ばなければならなかった。しかも、日本語の仮名文字に相当する、教育用の表音文字が存在しなかったため、子どもは数千字の漢字と、それに対応する読音をひたすら暗記し続けなければならない。

苦痛を伴う暗記学習によって難解な言語を習得する文化は、中世欧州のラテン語・ギリシャ語学習に共通する。しかし、17世紀にプロテスタントはこれを改革し、すべての人が学べる言語教育を実施しようとした。絵でラテン語とドイツ語のつづり方を学べるようにした『世界図絵』(Orbis Pictus, 1658)で知られるコメニウス (Johannes Amos Comenius, 1592-1670) は、『大教授学』(Didactica magna, 1657)において、神の似姿である人間は、あらゆる事物の姿を受け取ることができると主張し、事物を観察し、楽しみながら段階的に学ぶ学習法を提唱する。

トレーシーの主張にもプロテスタントの教育観が強く反映されている。トレーシーは、単にアルファベットの導入だけでなく、少年の親しみやすい事物を表現する文字から、徐々に複雑なものに至る教科書を使用すること、教師が物語や逸話を通じて教えること

を主張し、子どもが段階的に、楽しみながら様々な知識を学ぶことの重要性を訴えた。

1836年に*The Chinese Repository*に掲載された無署名の記事も、中国の言語学習が機械的で精神の働きが省みられていないことと、読み書きできるまでに極めて長い年月が費やされることを批判し、漢字をよく観察し、部首の組み合わせをパターン化する学習法を提言した¹⁰⁾。

宣教師は、中国上陸以前に、教育言語としての漢字・漢文に否定的な見解を持っており、長期にわたる暗記学習が、中国人の保守的な性格を生み出し、未知のものに対する興味や関心を失わせていると考えていた。

3. 宣教師によるローマ字化された厦門語による言語教育

3.1. 1840年代 宣教師の中国への上陸と困難

アヘン戦争（1840-1842）の終結によって、清朝はイギリスとの間に南京条約（1842）を締結し、香港を割譲し、広州、福州、厦門、寧波、上海の五港を開港する。1844年にはアメリカやフランスとも同様の条約が結ばれた。この機に応じて、最初に厦門に上陸した宣教師は、アメリカ改革派教会（中国名：帰正公会、Reformed Church in the America）のアビール（David Abeel, 1804-1846）と、米国聖公会（Episcopal Church in The United States of America）のブーン（William Jones Boone, 1811-1864）の2人であった。彼らは、南京条約の締結（1842. 8. 29）に先立つ1842年2月24日、イギリス軍占領下の厦門にイギリス軍艦に乗って上陸した。清朝が外国人による中国国内での自由な宣教を認めたのは、アロー戦争（1856-60）後に締結された北京条約（1860）だが、宣教師はこれを待たずに、上陸直後から厦門の下層社会に対して、宣教活動を開始した¹¹⁾。

宣教を開始した宣教師が、上陸直後に遭遇した最初の困難は、民衆の無知による貧困と悪習であった。宣教師が接触した、下層社会の民衆の生活は悲惨なものであった。Matheson（1866: 3）は、上陸当時の厦門の様子を次のように記録する。

島の西部に位置する厦門の街は、15万人の住民がいると言われているが、彼らの多くはとても困窮している。通りは非常に狭く、中国の他の街よりも汚れている。人々は、一般的に痩せ衰えて黄ばんでいるが、それは貧困と、住居が混みあっていることが原因だけでなく、アヘン吸引の習慣の流行による。

1840年代前半には、ロンドン教会宣教会（中国名：倫敦公会、The London

Missionary Society)、アメリカ合衆国長老教会 (The Presbyterian Church in the United States of America) などの様々な会派の宣教師が廈門に上陸しているが、その多くは短期間で廈門を離れている¹²⁾。本部の指示により他の都市で宣教を行うことになったのに加えて、衛生問題に起因して、健康被害を受ける宣教師が続出したためであった。例えば、最初の宣教師アビールは、1844年に体調を崩し廈門を離れ、1846年に死亡している。その後を引き継いだドーティ (Elihu Doty, 1809-1864) 一家も妻と息子を失い、同僚のポールマン (William John Pohlman, 1812-1849) 一家も同じく妻と二人の子どもを失った上に、自身も目を思い視力を失っている。民衆の貧困や悪習が引き起こす衛生問題は、宣教師自身の生死に関わる重大な問題であった。宣教師は、その根本的な原因である無知に文明の光を当てるため、医療と教育に力を傾けた。

宣教師が次に遭遇した難問は、言葉だった。民衆に西洋文明を教授するためには、媒介となる言語が必要となるが、民衆には官話も漢字・漢文も通じなかった。識字率に関して、上陸以前に宣教師は、成人の男性の半数ほどが漢字・漢文の読み書きできると信じていた (蒲2009: 5)。また、話語についても、1832年にメドハースト (Walter Henry Medhurst, 1796-1857) が『福建方言辞典』 (*A dictionary of the Hok-k'èen dialect of the Chinese language*) を刊行したように、官話の変種である方言が使用されていると考えていた。

しかし上陸後、接触した民衆の話語は地域ごとに大きく異なり、それぞれが別個の言語のようであった。ポールマンは、1844年に次のように報告している。

私たちはまた言葉の限界に遭った。この奇妙な言葉のパズルには多くの方言があり、声調と変化はすばらしく、多くの点で理解するために不可欠に重要であり、新しい言語のようだ (De Jong, 1992: 18)。

ポールマンは、上陸後に245頁にわたる廈門語のノートを作成し、民衆の話語を整理した。ポールマンの廈門語研究は、途中で眼病を患った本人に代わり、ドーティがこれを引き継ぎ、212頁の『英漢廈門方言羅馬注音手冊』 (*Anglo-Chinese manual : with romanized colloquial in the Amoy dialect*) としてまとめ、1853年に広東で出版した。ポールマンとドーティは、廈門の民衆の言語使用を観察し、民衆の話語をローマ字により文字化したのである (De Jong, 1992: 19)。

ドーティは妻と子を失い、1845年にいったんアメリカに帰国すると、タルミジ (John Van Nest Talmage, 1819-1892) を連れて再び廈門に戻った。タルミジは、ポールマンと

ドーティの厦門語研究を引き継ぎ、これを民衆に対する言語教育へと応用していった。

3.2. 1850年代 宣教師によるローマ字厦門語を用いた言語教育の開始

1846年、厦門に到着したタルミジは、1852年に厦門語のローマ字つづり字教材である『唐話番字初学』(Tâng-oē Hoan-jī Chho-hák, *Primer of the Amoy colloquial*)を出版した。『唐話番字初学』は、彼らの話語を使い、最も簡易な方法で文字の綴り方を中国の民衆に教える最初の一つり字教材であった。タルミジがこの教材を作成したのには、プロテスタントの持つ歴史的な背景と、厦門の宣教師が直面した言語問題のためであった。

宣教師は、高位言語としての漢字・漢文と民衆の話語が乖離している中国の言語社会に直面し、宗教改革前の欧州の言語社会を想起した¹³⁾。書記言語が、ラテン語やギリシア語を習得した知識人階層によって独占され、民衆がリテラシーを持たなかった中世欧州と同様に、中国の書記言語も読書階層によって独占されていると考えたのである。そこで、欧州でドイツ語や英語を用いて聖書を翻訳し、民衆にリテラシー教育を行ったように、中国でも、民衆の話語を用いた聖書と言語教育が必要となると考えた。

1851年に*The Chinese Repository*に掲載されたローマ字聖書の小冊子に関する記事では、宣教師の言語教育観は次のように語られている。

現在では、中国の文人は、話語から距離を保っている。彼らは話語で本を書くことは決してないが、彼らが立っている困難という名の丘に、苦勞して上ることを人々に強いている。宣教師は、博士らのラテン語と修道士らの修道院から神の言葉を取り、彼らが軽蔑するドイツ語とサクソン語に与えた時のルターやティンダルのように、丘のふもとにいる人々に、新たな思考と衝動を、人々の母語を通じて与えなければならない¹⁴⁾。

タルミジは、このような言語教育観を持ち、民衆へのリテラシーという厦門の宣教師が直面した問題に取り組んだ¹⁵⁾。1851年、ボストンで発行されていた英字雑誌*The Missionary herald* (1821-1934)に掲載されたタルミジの手紙は、ローマ字による教育を開始した経緯を詳細に報告している¹⁶⁾。

タルミジは手紙の中で、まず「おそらく、この地域の男性の10分1以下の人しか知的に読むことができない。女性でそうすることができる人は非常にまれである」と、民衆の識字能力の低さを問題視する。そしてその原因は、厦門の話語と中国の書記言語が大きく乖離し、聡明な子どもでも3年から5年を漢字の学習に費やすためであると分析す

る。そこで現在、ローマ字を用いて聖書の教えを伝えられないかを試していると述べる。この手紙を読んだミッションの同朋は、今後教育上の障害に不安を抱くことはなくなると、自信を持ってその効果を報告している。

タルミジは、言語教育で使用するローマ字表記に関して、わずか17文字と記号を使って廈門方言のすべての母音と子音を表現することができ、学習者は単音節から始めて、これを組み合わせることにより単語や文をつづることができる、と、その利点を説いた¹⁷⁾。その教育上の効果については、すべての少年が3か月未満で聖書を読む準備ができたこと、自らの経験にもとづく成果を述べ、成人向けの週4回クラスでも十分な効果があると力説した。

教授法を確立するまでの経緯についてタルミジは、「ヤング博士が彼の学校において、ローマ字で書かれた俗語を教え始めた」と述べ、英国長老教会(The English Presbyterian Mission)のヤング(James H. Young, ?-1853)が、黒板を用いて口授し始めたのがその始まりであるとする。そして、印刷された入門書やつづり字教材がないことを嘆き、設備が整えば、教会のすべての信者がこのシステムによって識字を学ぶことができると訴えた。

この当時、廈門にはまだ活字印刷を行うための設備がなく、広東で出版するには、費用と校正の問題が生じた。また、この頃になると、廈門で宣教を行う会派は、「閩南三公会」と呼ばれる三つの会派に絞られていた。すなわち、最も初期にアビールが上陸し、続いて、ポールマンとドーティがそれを引き継ぎ、タルミジが40年にわたり教区を拡大させたアメリカ改革派教会、他には、1844年より廈門での宣教を開始したロンドン教会宣教会、さらには香港での宣教から1850年に廈門へと範囲を拡大した英国長老教会の三会派である¹⁸⁾。これらの会派は宣教する地域の重複を避けながらも、互いに情報を共有しており、言語問題でも協力し合っていた。

1876年に*The Chinese Recorder*に掲載された報告には、24年間にわたって印刷された、約35種類のローマ字廈門語教材の目録が掲載されている¹⁹⁾。第1表は、これをもとに作成したローマ字廈門語教材の一覧である。アメリカ改革派教会と英国長老教会だけでなく、ロンドン教会宣教会もこれに続き、60年代、70年代に廈門に来た宣教師も教材作成に加わった。タルミジらが開始した言語教育の手法は、宣教師と民衆にとって、簡便で親しみやすいものであった。

第1表 ローマ字廈門語教材一覧 (1852-1876)

発行年	著者	書名	備考
1852	V. N. J. Talmage	『唐話番字初学』Tîng-oē Hoan-jī Chho-hák. <i>Primer of the Amoy colloquial.</i>	廈門語のつづり字教材
	W. Young	Yàng sin shin she sin pëen. <i>New Hymn Book.</i>	讃美歌集
1853	V. N. J. Talmage	<i>Small Primer of the Amoy colloquial.</i>	『唐話番字初学』の縮約版
		Lō-tek ê chheh. <i>The Book of Ruth.</i>	旧約聖書『ルツ記』
	W. Young	『天路歷程』Thián Lō Lèk thèng. <i>The Pilgrim's Progress.</i>	ジャン・パニヤンの寓意物語
1857	J. Stronach	Yàng sin shin she sin pëen. <i>New Hymn Book.</i>	ヤングの讃美歌集を増補
?	V. N. J. Talmage	Ióng sim sîn si. Tì E-mng In. <i>Hymn Book in the Amoy dialect.</i>	ヤングの讃美歌集に、ダグラスの訳を追加
1860	V. N. J. Talmage	<i>Liturgical forms.</i>	典礼の形式について
1862	C. Douglas	『漳泉神詩』Chang tseuen shin she. <i>Chang-chow and Tseuen-chow Hymns.</i>	タルミジの讃美歌集を漳州語、泉州語に翻訳
	W. C. Burns	『厦腔神詩』Hea k'eung shin she. <i>Hymns in the Amoy dialect.</i>	讃美歌集
1867	J. Stronach	『使徒行伝』Sù-tô hēng-toān, E-mng ê Khi u ⁿ -khàn. <i>Acts of the Apostle.</i>	『使徒行伝』
		『使徒行伝』Sù-tô hēng-toān. <i>Acts of the Apostle.</i>	漳州語版
1868	V. N. J. Talmage	『路加福音伝』Lō-ka hok-im toān. <i>Luke's Gospel.</i>	『ルカによる福音書』
1869	H. Cowie	Sèng-chheh ê bün-tap. <i>Catechism of Old Testament History.</i>	『旧約聖書のカテキスム』
1870	V. N. J. Talmage	Sù-tô iok-hân ê sam su. <i>John's Three Epistle.</i>	『ヨハネによる手紙』
1871	J. Stronach	『約翰福音書』Iok-hân hok-im toān. <i>John's Gospel.</i>	『ヨハネ福音書』
	V. N. J. Talmage	Sù-tô Pó-ló kia hō Ka-liáp-thài chiah-ê kàu-hōe ê phoe. <i>Paul's epistles to the Galatians, Ephesians, Philippians and Colossians.</i>	『ガラテア人、エフェソ人、フィリピ人、コロサイ人への手紙』
	H. Cowie	Sèng-chheh ê bün-tap sin iok. <i>Catechism of New Testament History.</i>	『新約聖書のカテキスム』
1872	V. N. J. Talmage	『馬太福音伝』Má-thài hok-im toān. <i>Matthew's Gospel.</i>	『マタイ福音書』
	C. Douglas	『養心神詩』Ióng sim sîn si. <i>Hymn Book.</i>	讃美歌集
	C. Douglas	Ióng sim sîn si. <i>Hymn Book.</i>	讃美歌集
		『詩編』Si-phian. <i>Book of Psalms.</i>	『詩編』

1873	J. Stronach	Pí-tek chiân su. Pí-tek hō su. <i>The first and second Epistles of Peter.</i>	『ペテロ書簡』
		<i>Paul's Epistle to the Ephesians.</i>	『エフェソ人への手紙』
		Thoân-tò iok-han bek-si-lok, <i>The Revelation of St. John.</i>	『黙示録』
	A. Ostrom	Má-ko hok-in toàn, <i>Mark's Gospel.</i>	『マルコ福音書』
	W.S. Swanson, W. Macgregor, H. Cowie	<i>The Epistle to the Hebrews.</i>	『ヘブライ人への手紙』
		<i>Paul's First Epistle to the Corinthians.</i>	『コリント人への手紙』
		<i>Paul's Second Epistle to the Corinthians.</i>	『コリント人への手紙』
	W.S. Swanson, W. Macgregor, H. Cowie, J. S. Maxwell	Lán ê kiù-tsú Iâ-so Kí-tok ê sin iok. <i>The New Testament of our Lord and Saviour Jesus Christ.</i>	『新約聖書』
V. N. J. Talmage	Siâu ê chho-hàk. <i>Small Arithmetic.</i>	算数教材	
J. H. V. Doren	Sùg siâu ê chho hàk. <i>Sequel to Small Arithmetic.</i>	算数教材の続編	
1875	V. N. J. Talmage	<i>Heidelberg Catechism.</i>	『ハイデルベルク教理問答』
?	L.W. Kip,	<i>Map of Palestine.</i>	パレスチナの地図

(Statistics of the protestant mission at Amoy.(1876) *The Chinese Recorder*, Vol. 7, pp.115-117 より作成。ローマ字表記は、原文ママ。)

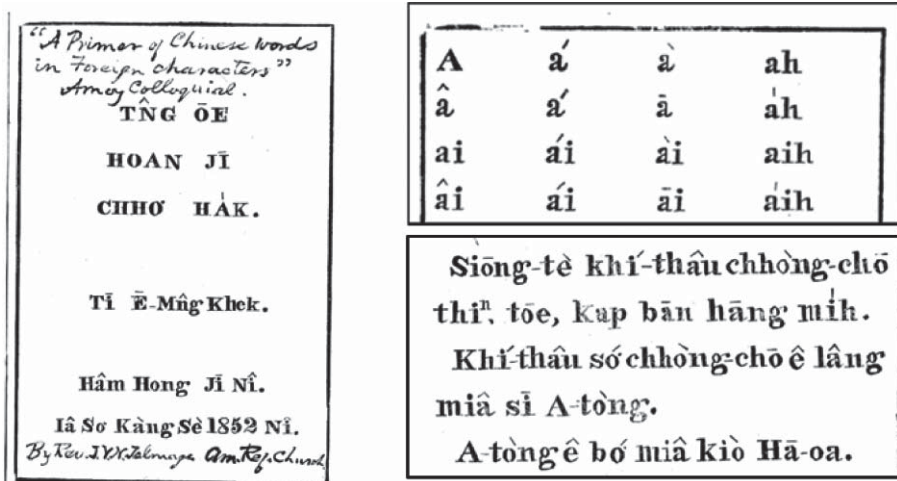
3.3. ローマ字廈門語教材を用いた教授法

宣教師の言語教育における、書記言語の教授法は、学習者が、廈門語の音韻をローマ字で一字ずつ綴ることを学ぶことから始まる。学習者は音韻を組み合わせ、単語のつづりを覚え、やさしい聖書物語の読解を学ぶ。

第1図は、『唐話番字初学』の表紙、音韻のつづり方、聖書物語の一部を抜粋したものである。『唐話番字初学』の頁数は、15丁表裏で30頁しかなく、音韻と単語のつづり字が25頁を占め、残り5頁が聖書物語となっている。13丁表の下部の聖書物語を漢字に直すと、口語体のやさしい表現であることがわかる。

上帝起頭創造天地与万項物。起頭所創造的人名是亜当。亜当的老婆名夏娃。
 訳:神はまず天地と万物とを創造した。最初に創られた人の名はアダムと言った。
 アダムの妻の名はイブと言った。(廈門語監修:陳巧香、叶好秋(京都大学大学院))。

同時期に印刷されたローマ字廈門語教材には、『唐話番字初学』のほかに、*Small*



第1図 『唐話番字初学』(左:表紙、右上:1丁裏、右下:13丁表)²⁰⁾

Primer of the Amoy colloquial. (1853)、『Lō-tek ê chheh』 (*The Book of Ruth*. 1853)、『天路歷程』 (Thi an Lō Lèk thèng. *The Pilgrim's Progress*. 1853)、『Khai gin-à è sim-hoe è chheh』 (*The Child's Deligh*. 1853)、『Yàng sin shin she sin pèen』 (*New Hymn Book*. 1853) などがある。

これらの教材は、木版の線装本で頁数は多くないが、それぞれの役割は明確であった。*Small Primer of the Amoy colloquial*は、わずか2丁4頁の『唐話番字初学』の縮約版だが、限られた予算で多くの信者に教材を行きわたらせるためのものであり、『天路歷程』は、天の都に至るまで道筋を旅に例え、信仰をわかりやすく理解するための寓意物語であり、『Yàng sin shin she sin pèen』は、ローマ字で讃美歌を学ぶための讃美歌集であった。すなわち、学習者はつづり方を学んだ後は、興味深く含蓄のある物語を読み、日曜には教会に集い、皆と讃美歌を歌うことができたのである。

この言語教育の手法は、廈門の宣教師独自のものではない。17世紀にイギリスで確立し、清教徒と共にアメリカに持ち込まれた民衆教育の手法であった。『天路歷程』はバニヤン (John Bunyan, 1628-1688) によって創作された物語であり、『Khai gin-à è sim-hoe è chheh』は、リー (Thomas Lye, 1621-1684) が、子どもが楽しんで学ぶために作成したつづり字と文法の教材『子どもの遊び』の翻訳である。タルミジはアメリカのニュージャージー州サマセット郡で生まれ、祖先は、1630年にボストンに到着した清教徒に遡る (Fagg, 1894: 15)。アメリカの初期の清教徒は、昼は労働に励み、夜には

家族で聖書物語を読み、日曜日には村人が教会に集っていた。宣教師はこのような清教徒の健全で文化的な生活を中国人にも送らせようとしたのである。

3.4. 宣教師の言語教育の特徴

廈門の宣教師による言語教育においては、漢字・漢文がまったく教えられず、効率のみが追及されていた。ところが後の中国人による言語改革運動では、漢字・漢文の教育を存続するか否かを巡って激しい対立が生じ、当時の中国の他の地域の宣教師の間でも、漢字・漢文を教授すべきかどうかの議論が生じている²¹⁾。廈門の宣教師はなぜ漢字・漢文をまったく教えなかったのだろうか。

タルミジらの廈門ミッションの宣教師は、宣教活動に関する報告書を数多く残しているが、言語教育に言及することは少ない。タルミジの関心は、廈門の人々が積極的に信仰生活を送ること、とりわけ現地の人々が自律的に教会を組織し運営していくことにあった。1850年代にタルミジの属するアメリカ改革派教会は、廈門島から隣接する同安と漳州に向けて教区を拡大したが、各地の教会組織をどのように運営していくかは大きな問題になっていた。タルミジは、アメリカ本国からの干渉を減らし、中国人による自律的な組織運営をめざし、本国と対立する。タルミジは、1863年の著書で、「アメリカ・オランダ改革派教会」と呼ばれていたアメリカ改革派教会の呼称について次のように述べている。

中国の教会はオランダやアメリカの植民地ではない。したがって、「アメリカ」や「オランダ」との二つの悪の言葉、或いはいずれかの一つの悪の言葉を伴うことはまったく必要ない。あなたがたの宣教師は、そのような悪を引き起こす助けに同意することは決してないだろう (Talmage, 1863: 13)。

タルミジは、本国からの指示なしに運営を行える独立した教会組織の確立をめざしており、言語教育はそのために必要な手段に過ぎなかった。そのため、最小限の学習時間と教育投資で、最も効率的な言語教育を実現する方法を模索したのである。

そこには、手間のかかる漢字・漢文教育が入り込む余地はなく、各地域で少しずつ異なる音声をどのように表音文字で表記するのか、という表記の正確さに関する議論も重要視されなかった。廈門の宣教師の多くは、実用性と利便性のみを重視した言語教育に賛同し、これを用いて教育を行った。タルミジは、この後1890年まで40数年間にわたり、廈門で宣教を行い、言語教育だけでなく、教会建設、学校の開設、教会組織の運営で多

くの業績を残すことになる。

4. ローマ字廈門語教育の普及と影響

4.1. 方言教育か俗語教育か

廈門の宣教師には、廈門語を「方言」(dialect)ではなく、独自の体系を持つ「俗語」(vernacular)と考える者もいた(赤桐2016: 22)。ダグラス(Carstairs Douglas, 1830-1877)は、1855年に英国長老教会のバーンズ(William C. Burns, 1815-1868)と共に廈門に上陸し、ドーティの『英漢廈門方言羅馬注音手冊』をもとに、廈門語の語彙を収集し、1873年に『廈門語辞典』(*Chinese-English dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy*)を出版する。この辞書の特徴は書名が示すように、廈門語を「方言」(dialect)でなく、「俗語」(vernacular)或いは「話語」(spoken language)と考え、漢字表記を廃して、すべてローマ字で表記している点にある。

ダグラスは、辞書の「前言」において、メドハーストが『福建方言辞典』において、廈門語を方言の一部と捉えたことに対し、「『方言』や『口語』(colloquial)などの用語は、その性質に誤った概念を与える。それは口語の方言やなまりではない」と批判する(Douglas, 1873: Preface)。ダグラスは書記言語と話語とが対応していないことをその理由に、漢字・漢文は、書記言語として中国全体で統一されているが、口頭のコミュニケーションでこれが使用されることはない、と指摘する。北京官話、客家語、広東や廈門の諸言語とその他の言語の関係は、一つの言語における方言ではなく、アラビア語、ヘブライ語、シリア語、エチオピア語などのセム語族の言語の間の関係であり、欧州でのドイツ語、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語の間の関係と同じ、同族言語であると主張する。

ダグラスのこの主張は中国各地の宣教師が持つ中国語観と大きく異なるものであった。中国の宣教師は、北京官話に代表され、読書階層が使用する教養のある話語と、漢字・漢文とを対にして「文理」(wen-li)と呼んでいた。宣教師の多くは、この文理の習得を、言語学習の目標と考えていた。しかし、ダグラスは、漢字・漢文を「言語というより表記(notation)」と呼び、話語とは別のものだと訴えた。

このダグラスの主張は、他の廈門の宣教師の支持を得た²²⁾。ローマ字による教育は、書記言語の学習時間を大幅に短縮したが、漢字・漢文のリテラシーには接続しなかったため、ローマ字を用いた教育は方言教育に過ぎないと批判されていたのである。

北京官話と漢字・漢文による教育が重視される北方の宣教師は、「廈門の学校がロー

マ字を用いて3年間で到達する成果に、マンダリン文字（漢字）では5年間かかる」と、漢字による教育の非効率性を認めつつも、「彼らは、「文理」で書かれた古典や中国の小説、或いは私たちのキリスト教の本を読めずにいる。（ローマ字を）外国の教師やクラスメイトとのメモに使っているのだろうか」と一部の教師から非難されたことを報告している²³⁾。

4.2. 台湾への拡大と生活圏における使用

厦門語による言語教育は、教区の拡大と共に厦門近郊の農村にも広がり、さらに台湾や東南アジアへと拡大し、1950年代まで1世紀にわたり使用され続けた。

台湾への拡大は、1860年にダグラスが台湾における宣教の可能性を調査したことに始まる。調査によって、台湾において福建語が広く使用されていることを知ったダグラスは、英国に一時帰国し、1863年にマックスウェル（James Laidlaw Maxwell, 1836-1921）を伴い、再び中国に戻った。マックスウェルは厦門で厦門語と宣教の手法を学んだ後、1865年から台湾で本格的な宣教を開始した。また1869年に帰国していたダグラスの演説を聞いたバークレー（Thomas Barclay, 1849-1935）も、1874年に厦門で厦門

第2表 ローマ字厦門語が伝播した地区と人数

地域	人数	地域	人数
福建（閩南など）	34,000	タイの華僑	7,000
広東（潮汕など）	1,000	フィリピンの華僑	7,000
台湾	32,000	マレーシアの華僑	10,000
他の省や市	8,000	インドネシアの華僑	10,000
ベトナムの華僑	2,000	その他の国や地域	3,000
ミャンマーの華僑	1,500	合計	115,500

（許2011: 81より転載）

第3表 ローマ字厦門語による出版物

出版物	種類	数量（冊）	出版物	種類	数量（冊）
聖書	28	9,400	初級読み物	5	228,000
詩	30	132,000	辞典	11	14,000
教義聖訓	113	416,000	科学読み物（歴史、地理、数学、衛生等）	42	86,500
教会物語	39	187,000			
その他教会書籍	18	22,000	中国の古籍	8	18,000
教会新聞・雑誌	4	1,117,000	出版物総数	298	2,314,500

（許2011: 83より転載）

語を学び、1875年から台湾で宣教活動を行い、1885年から、ローマ字新聞『台湾府城教会報』(*Taiwanfoo Church News*)を発行し、ローマ字による教育を推進した²⁴⁾。

ローマ字化された廈門語は、民衆の間の通信文に使用され、廈門から移住した東南アジア各地の華僑の間でも使用された。また、キリスト教関係だけでなく、中国の小説や寓話もローマ字化され、台湾の『台湾府城教会報』には、台湾人によって創作された散文や伝記物語が数多く掲載された²⁵⁾。

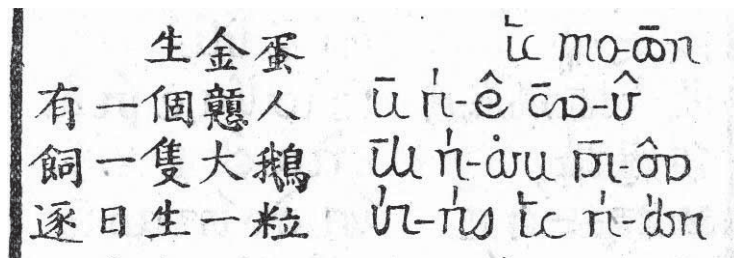
1955年にローマ字廈門語の使用状況を調査した廈門大学の黄典誠は、当時、計115,500人がなお使用しており、中国大陸だけで、298種累計231万部の図書(120万冊)と新聞・雑誌が残されていると統計した(許2011: 81)。第2表と第3表は、この統計を転載したものである。この統計では、(1)使用者が福建省に次いで台湾に多いこと、(2)東南アジア各地の華僑に広まっていること、(3)歴史や数学などの教科教育に関する書物も多く出版されていることが報告された。

4.3. 中国人による言語改革への影響

盧翹章が言語改革を提唱した1890年代には、ローマ字廈門語による言語教育は、信者の間で普及し定着していた。盧は、これを通じて、民衆の無知に対する問題意識と、民衆の話し言葉を簡易な表音文字で表記する言語教育の手法を学んだ。

盧の言語教育観と宣教師のそれとを比較すると、盧の着想の多くは宣教師の言語教育に依拠しているものの、そのまま引き継いだわけではないことがわかる。盧は言語教育の目的を、「民衆の救済」から「国家の振興」へと転向させ、教育法に、独自の表音文字と漢字・漢文とを導入した。

第2図は、盧のつづり字教科書『一目了然初階』の一部を抜粋したものである。『イソップ物語』の「ガチョウと黄金の卵」が、左側は漢字で、右側は盧が作成した「切音新字」で示されている²⁶⁾。盧の言語教育の手法は、宣教師と同様に、廈門語のつづり方を音韻



第2図 盧翹章 (1892: 54) 『一目了然初階』

から学び、単語、文へと進んでいくが、盧はそこに漢字を追加した。盧は、簡易な切音新字の習得が重要であると考えており、まずは切音新字を学び、手紙を書いたり、読書ができるようになった後に、聡明な者は漢字学習へと進むようにと説明している。

しかし、この独自の表音文字の導入と、漢字・漢文との併記は、後に大きな混乱をもたらした。

まず、ローマ字ではなく、厦門語を独自の表音文字で表記したことにより、言語ごとに異なる表音文字が必要だと中国人には捉えられた。そのため、1890年代には香港、上海など、異なる地域でいくつかの表音文字案が作成され、その優劣を巡って対立した。その結果、注音符号や拼音によって、表音文字が統一されるまでに数十年の時間が費やされることとなる²⁷⁾。

次に、漢字・漢文が併記されたことにより、切音新字は漢字の読音を学ぶためものだと読書階層は考えた。盧のつづり字教科書は、漢字・漢文が主であり、切音新字は、漢字の読音を厦門音で表記したものとみなしたのである。読書階層は、漢字の形、音、義(意味)を規範化すべきものとして捉え、漢字の読音を表音文字によって正しく表記することこそが言語改革の目的だと考えた。清朝が崩壊し、中華民国が成立した後、1913年に招集された言語政策に関する部会の名称は「読音統一会」であり、この名称は読書階層の見解を要約している。

5.1. 結論

本稿は、言語教育政策史の観点から、19世紀中葉の中国厦門におけるプロテスタント宣教師による言語教育を考察し、次の事実を明らかにした。

宣教師は、1830年代にすでに中国人の性格と漢字・漢文学習とを関連付けて否定的な見方を持っており、1840年代には民衆の無知と識字率の低さを大きな問題だと認識していた。1850年代に、厦門の宣教師は、『唐話番字初学』をはじめとするローマ字厦門語教材を次々と開発し、民衆に対する言語教育を実施した。その教授法は、民衆が厦門語のつづり方を、ローマ字を用いて学習した後は、聖書物語を読み、讚美歌を唱和することをめざすもので、17世紀にイギリスで確立し、その後アメリカで広がった民衆教育の手法を中国に応用したものであった。宣教師の言語教育は、効率を重視し、漢字・漢文を用いないものであったが、そのために宣教師の一部には、厦門語を方言ではなく、宗教革命以前の英語やドイツ語と同様に俗語とみなす者もいた。ローマ字化された厦門語は、1860年代に福建系の移民の多い台湾や東南アジアにも拡大し、1890年代には、盧戇章によって中国の読書階層に紹介された後に、梁啓超ら中国の読書階層による言語

改革の議論を引き起こすこととなった。

5.2. 今後の課題

黎(1934: 91)は1930年代に、国語(中国語)運動のスローガンとして「言文一致」と「国語統一」を挙げているが、宣教師による言語教育は、これとは異なるものであった。

宣教師にとって、「言」とは、厦門語、広東語などの民衆の話し言葉を指していた。そのため、中国人による言語改革でも厦門語(『一目了然初階』)、上海語(『盛世元音』)や広東語(『拼音字譜』)による教育が試みられた。これがその後も継続していれば、英語やドイツ語を用いた民衆教育が独自の言語アイデンティティを生み出したように、現代中国の言語社会も大きく変容した可能性がある。しかし、現実には中国大陸において、厦門語や広東語は一つの「方言」に過ぎないとみなされている。

これは、1900年ごろ「国語」の言語観が中国にもたらされ、宣教師の導入した言語教育観が否定されたことによる。「国語」という言語観においては、「言」は官話、「文」は漢字・漢文であり、この「言文」からなる「国語」をもって、中国全土の言語使用が統一されなければならないと考えられた。宣教師から見れば、「国語統一」推進派が重視する北京官話も、漢字・漢文も民衆の言語使用の実態にはそぐわず、教育言語としては効率の悪い方法であった。事実、その後の言語改革は長い時間を必要とした。中国の読書階層は、なぜこのような効率の悪い手段を選んだのだろうか。この「国語統一」が中国に導入された過程については、稿を改めて探究したい。

注

- 1) 盧愷章(1895)「変通推原説」『万国公報』第78冊、梁啓超(1896)「沈氏音書序」『時務報』第4冊、胡適(1922)「卷頭言」『漢字改革号』国語月刊特刊等。
- 2) 本稿では、プロテスタント宣教師の言語教育のみを対象とし、カトリック宣教師の中国研究には触れない。カトリック宣教師は、中国の言語には関心を示したが、民衆の言語使用には関心を持たなかった(蒲2009: 4、ラマール2005: 175)。
- 3) 盧愷章の事跡については、許(2000)を参照。
- 4) 盧愷章(1895)「変通推原第二章」『万国公報』、華文書局影印本(1968: 15541)
- 5) 宣教師の使用したローマ字は、「白話字」や「教会羅馬字(教会ローマ字)」と呼ばれるが、宣教師自身は単に「ローマ字化」(romanization)や「ローマ字化された口語」(romanized colloquial)と呼んでおり、本稿でもこれに従う。
- 6) 「国語(中国語)運動」の文脈における歴史的研究では黎錦熙(1934)『国語運動史

研究』が、「文字改革」の文脈では倪海曙（1959）『清末漢語拼音運動編年史』や周有光（1961）『漢字改革概論』が重要である。黎（1934）は宣教師の活動については触れず、倪（1959: 1-3）と周（1961: 22）は拼音運動の前段階として宣教師のローマ字化に言及するが、中国人による拼音運動との直接の関連は否定する。

- 7) 宣教師の活動を重要視する研究においても、「宣教師たちは中国の内的な秩序に変動を呼び起こすようなことを唱えるのに躊躇した」（蒲2009: 4）と、中国人による言語改革に対する影響を限定的に捉えたり、或いは「国語（中国語）」の影響をより重要視（村田2005: 6-10）する傾向がある。
- 8) Bridgman (1832) Introduction. *The Chinese Repository*. Vol. 1, pp.4-5 日本語訳については、岩井（1942: 31-35）を参照。
- 9) Tracy (1835) An alphabetic language for the Chinese. *The Chinese Repository*. vol. 4, pp. 167-172 日本語訳については、岩井（1942: 69-76）を参照。
- 10) Mode of teaching the Chinese language: defects of the present method; desirableness of a new one, with suggestions respecting its introductions. (1836) *The Chinese Repository*. Vol. 5, pp. 61-65
- 11) 李（2010）はこの状況を「バイブルとガン」と象徴的に表現し、民衆には、宣教師に対して中国の社会秩序を破壊する者として反感を抱く者がいたと同時に、清朝の官憲に対抗しうる新たな権力者とみなす者がいたことを指摘している。
- 12) 初期の宣教師の滞在期間は、ブーンは1842年から1844年、ヘボン（J. C. Hepburn）は1843年から1845年、アビールは1842年から1844年、カミング（W. H. Cumming）は1842年から1847年である。
- 13) 宣教師が漢字・漢文を、ラテン語・ギリシア語と同じ高位言語とみなしていたことを最初に指摘したのは、蒲（2009: 9-10）である。
- 14) Art. X. Bibliographical notices. (1851) *The Chinese Repository*. Vol.20, p.477
- 15) 「問題は、この人々を読書人にする方法があるかどうかであり、特にキリスト教徒に神の言葉を手に入れさせ、彼ら自身によってそれを理知的に読むことができるかどうか、という問題が当地の宣教師の思考の大部分を占めた。」（Fagg, 1894: 106）、（蒲2009: 9）
- 16) Amoy. Letter from Mr. Talmage, December 17, 1850. (1851) *The Missionary herald*. Vol. 47, pp.153-154
- 17) ラテン文字は26字であるが、タルミジは「17字の使用で」（By the use of seventeen letters）と記している。

- 18) 中国で宣教を行った会派の組織や呼称は、年代や地域によって異なることがある。本稿では、De Jong(1992)の中国語版の記載を参考にした。
- 19) Statistics of the protestant mission at Amoy.(1876) *The Chinese Recorder*, Vol. 7, pp.115-117
- 20) Serica (http://viewer.bodleian.ox.ac.uk/chinese/page.php?book=sinica_1607) より2016年3月16日ダウンロード。
- 21) 宣教師における、漢字・漢文とローマ字の使用に関する議論は、ラマール(2005)を参照。
- 22) Statistics of the protestant mission at Amoy.(1876) *The Chinese Recorder*, Vol. 7, p.114.
- 23) Romanized Colloquial. (1897) *The Chinese Recorder*, Vol. 28, 1897, pp.25-27.
- 24) 台湾におけるローマ字による教育は、「白話字」、「教会羅馬字」或いは台湾語研究で蓄積されているので、本稿では深く触れない。
- 25) 国立台湾師範大学台湾文化及語言文学研究所が運営するウェブサイト「台湾白話字文献館」(<http://pojbh.lib.ntnu.edu.tw/script/index.htm>) は、デジタル化された資料を公開している。
- 26) 盧は、トーム (Robert Thom,1807-1846) の漢訳イソップ物語『意拾諭言』(1840)を参照した可能性がある。『意拾諭言』では、英文、漢文、広東語が併記されている。イソップ物語の漢訳と普及に関しては、内田(2014)を参照。
- 27) 1890年代の文字案に関する議論は、赤桐(2016)を参照。

文 献

- 赤桐敦(2016)「19世紀末、中国における民衆への言語教育観の変化—『万国公報』誌上の盧愷章の論説と梁啓超への影響を中心に—」『言語政策』(12) 3-26
- 岩井大慧監修、沼田軻雄解説(1942)『支那叢報解説』丸善株式会社
- 内田慶市(2014)『漢訳イソップ集』ユニウス
- 蒲豊彦(2004)「清末宣教師の文字改革と標準表記システム」『第四回文字文化圏近代語研究会予稿集』155-156
- 蒲豊彦(2009)「庶民のための書き言葉を求めて—清末から民国へ」森時彦編『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所3-26
- 鶴見良次(2009)「ABCと聖書：17世紀後半のイギリスにおけるアルファベット=綴字教育とその教材」『成城文藝』(206) 136-127

- 藤井（宮西）久美子（2003）『近現代中国における言語政策』三元社
- 村田雄二郎、C.ラマール編（2005）『漢字圏の近代：ことばと国家』東京大学出版会
- 陳以平（2008）『閩南話羅馬字課本』内部発行
- 黎錦熙（1931）「三十五来之国語運動」『最近三十五年之中国教育』商務印書館
- 黎錦熙（1934）『国語運動史綱』商務印書館、2011年再版、商務印書館
- 李宇明（2003）「清末文字改革家論語言統一」『語言教学与研究』2003（2）1-11
- 李宇明（2005）「切音字的内涵与外延」『福建師範大学学报（哲学社会科学版）』2005（3）96-102
- 李榭熙（2010）『聖經与槍炮—基督教与潮州社会（1860-1900）』北京科学文献出版社
- 倪海曙（1959）『清末漢語拼音運動編年史』上海人民出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『伝音快字』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『拼音字譜』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『閩腔快字』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『盛世元音』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『一目了然初階』文字改革出版社
- 清末民初報刊叢編（1968）『万国公報』華文書局
- 時世平（2013）「救亡・啓蒙・復興—現代性焦慮与清末文字救国論」『南開大学学报（哲学社会科学版）』2013（1）85-94
- 王東杰（2009）「从文字變起：中西学戰中的清季切音字運動」『中山大学学报（社会科学版）』2009（1）49、83-94
- 王爾敏（1982）「中国近代知識普及化自覚及国語運動」、王爾敏（2002）『近代文化生態及其變遷』百花洲文芸出版社291-338
- 吳稚暉（1931）「三十五来之音符運動」『最近三十五年之中国教育』商務印書館
- 許長安、李樂毅編（1992）『閩南白話字』語文出版社
- 許長安（2000）『語文現代化先驅 盧懋章』厦門大学出版社
- 許長安（2011）『語文耕耘集』厦門大学出版社
- 中国近代期刊彙刊（1991）『強学报・時務報』中華書局
- 周有光（1961）『漢字改革概論』文字改革出版社

Douglas, Carstairs (1873), *Chinese-English dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy : with the principal variations of the Chang-Chew and Chin-Chew dialects.* Trübner

- De Francis, John (1950), *Nationalism and Language Reform in China*. Princeton University Press.
- De Jong, Gerald Francis (1992), *The Reformed Church in China 1842-1951*. Wm. B. Eerdmans Publishing、中国語版、楊麗、叶克豪訳 (2013) 『美国婦正教在厦門1842-1951』龍岡騰文化有限公司
- Fagg, John Gerardus (1894), *Forty Years in South China: A Biography of the Rev. John Van Nest Talmage*. Board of Publication of The Reformed Church in America
- Macgowan, John (1883), *English and Chinese Dictionary of The Amoy Dialect*. A.A. Marcal
- Matheson, Esq. Donald (1866), *Narrative of The Mission to China of The English Presbyterian Church*. James Nisbet & co.21 Berners Street.
- Pitcher, P. W. (1842), *Fifty Years in Amoy or A History of the Amoy Mission, China*. Board of Publication of The Reformed Church in America
- Richard, Timothy (1916), *Forty-Five Years in China*. T. Fisher Unwin ltd
- Talmage, John Van Nest (1863), *History and Ecclesiastical Relations of the Churches of the Presbyterial Order at Amoy*. China, Hallenbeck & Thomas, Printers

Protestant missionaries' language education in Amoy dialect in the Mid-19th Century in Amoy: As the Origin of Language Reformation in China

AKAGIRI Atsushi

Key words: The History of Language Education Policy, Language Reformation in China, Church Latin alphabet, Peh-oē-jī, Protestant Missionaries

Abstract

By the creation of modern Chinese language, from the last 19th century to the mid-20th century, language reformation was repeatedly made in China. This article assumes that this language reformation was formed through the language education for Amoy people by Protestant missionaries in the mid-19th century and examines its background, its implementation status and its effect from written documents. After the end of the Opium War, when Protestant missionaries came to Amoy, they thought Chinese literature lead to ignorance of Chinese people and implemented language education for people using Romanized Amoy dialect. As it was highly effective in that people can be literate in about three months, this language education expands to the suburbs of Amoy, Taiwan and overseas Chinese in Southeast Asia. The language reformation campaign which started in the 1890s by Chinese people was influenced by this language education, implementing education using simple letters and vernaculars of people, and its views of language education defied traditional Chinese society.

(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)